
壁だらけのスクールライフ ～バッドネス セブンデイズ ウォー～

魅童 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壁だらけのスクールライフ 〜バッドネス セブンデイズ ウォ
ー

【Nコード】

N0701G

【作者名】

魅童 直

【あらすじ】

学校生活に苦悩する東堂カイ（17）その発端とも言つべき不良グループを壊滅させる為、危険を冒して戦いに挑む

第1回 拳とナイフ

バッドネス セブンデイズ ウォー

人生には乗り越えなくてはならない壁がいくつもある。

東京某所にある 私立絞満しづまん高校

色んな意味であまり良くない学校である。

現在、この学校を裏から掌握に収めようとするグループが暗躍し始めていた

「オレはこの学校が嫌いだ。それでも卒業まで乗り越えなくちゃならねえ。」

東堂カイ（17）

彼はこの学校での生活に嫌気をさしていた

理不尽にキレる教師達

授業態度が異常なクラスメイト

生徒の事を考えない学校の体制

そして裏で暗躍するグループ

毎日の様にこの学校に入学した事を悔やんでいた。

「あいつらがいるからこの学校はピリピリしてんだ。学校の為じゃない。オレ自信の学校生活を良くする為に戦ってやる。」

一方、校舎裏で薬物を売買する2人組がいた。

「今日は18万稼いだ。日に日に客増えてんぞ。ハルミ、クラブでも行こうぜ。」

水原憲次

不良グループの一人だ。

「ねーたまにはもっとオシャレな店行こうよ。お金あんじゃないお金。」

夏牧ハルミ

憲次と同じグループに所属する不良少女である。

「アホウめ。もっと余裕出来たら連れてってやんべ。あと1週間待てって。」

その頃、カイは例のグループを探し回っていた。

「一人で見つけろんだ。そしてオレは英雄となるのだ。クラスでは浮いてるままで良い。」

そこへ、とんでもない悪さをする少年を発見。

「これ。最高だよ。今日が特別に8千円だ。トべるよ。先公に見つかんねえ様にしろよ。ギャハ。」

体育館裏で堂々と薬トラックを売っている

カイはすぐさまその少年のもとへ向かう。

「おい。おめえ。最近暗躍してる奴らのアレの一種だろ。わかるぞ。オレ。」

「何だテメエこらあ！チクる気かおお！？」

いきなりキレる少年

「チクるかどうかは別として、お前は成敗するぜ。」

「商売の邪魔すつともう憲次さんがタダじゃおかねえぞ！ええ！？」

「おお！タダじゃおかせられるもんかあ！シバキ合いだあ！」

そしてカイと少年との乱闘が始まった。

それは壮絶な戦いで失禁しそうだった。

「ハア、ハア。やるなあ。少年。こんな強い奴は小学生の時のガキ大将の森君以来だ。」

カイはかなりダメージを負っていた。

「グフ！ハッオレはその森君じゃねえんだぜ。返り咲き・・・返り討ちにしてやんよ！」

「なんだってえ！？」

どうやら言い間違えたようだ。

少年はサバイバルナイフを取り出した。

「刺されなくなったら失せるこのポンチがあ！」

^{ドク}武器を持った為か余裕の表情だ。

それを見てカイは

「へひゃ！オレは今ビビッてるぜ！ナイフ突きつけられたのなんか初めてだ！」

やはりナイフは怖い様だ。

しかもサバイバルナイフである。

「怖いだろう！さあ早く失せな！誰にもチクんじゃねえぞ！」

「うん。」

後ろに振り向き、歩いて行くカイ。

「死ねええいやあ！」

背後に切りかかる不良少年

しかしカイもすぐに振り返り右ストレートをぶちかました。

「ぜりゃああああ！」

「ぶごあつはあ！」

カイの拳は少年の顔面に直撃した。

少年はその場に倒れこむ

しかし少年のナイフもカイの肩を深く切りつけていた。

「グウウアア！この、クサレ商人^{バイヤ}が！オラッオラッオラッ」

ドカ！バシ！ドカ！

少年は倒れているところを更に踏みつけられ、気絶。

「^{イデ}痛い。この傷どうしよう。保健室に行くわけにもいかねえ。うう、^{イデ}痛えなあ。休もう。」

壁にもたれかかるカイ。

幸か不幸か、校舎裏なので人目にはつかない。

「こんなところで諦めねえぜオレア。全員引きずりだしてやる。ぐ、やべ・・・傷が。」

出血はひどく、重症であった。

そこへ

「大丈夫？私が手当てしてあげるわ。味方だから安心して。」

「・・・！？」

果たしてこの謎の少女の正体は？

つづく

第1回 拳とナイフ（後書き）

以前から学校生活に起こり得る「課題」をテーマにした作品を書きたいと思っていました。

頭の中に思い描いていた作品です。

面白い作品になるようにがんばりたいです。

第2回 影は笑う（前書き）

学校を支配しようとする謎の集団を追う東堂カイ。不良少年との乱闘の末重傷を負ったカイの前に、1人のツ少女が現れる。

第2回 影は笑う

カイは突然現れた少女に警戒する。

「私は水谷絢。アナタと一緒に例のグループを追ってるの。さあ、傷を見せて。」

水谷絢と名乗る少女はどう見ても普通の女の子で、危険を冒す様な人間には見えなかった。

「手当てしてくれるのはありがてえ。しかしなんでアンタもあいつらを追ってるんだい。」

「ちょっとワケがあつてね。強いて言うなら正義感ってトコね。」

器用にカイの傷を手当する絢

「・・・正義感か。オレとは少し違うな。オレは自分の為にやってるんだ。穏やかなスクールライフをおくる為にな。」

「そうなんだ。」

カイの手当てししながら絢は更にこう話を持ちかけた。

「ねえ。奴らを追う目的は一緒なんだから、協力しない？私、色々情報も持つてるし。」

「・・・!」

絢の話に対しカイはしばらく間をあけて答えた。

「・・・協力か。誰かと手を組むなんて考えもしなかったぜ。でもオレは一人でやりたい・・・」

「お願い！どうしても仲間が必要なの！私1人でなんて出来ない！一人でも多くの仲間が欲しいのよ！」

絢はさっきまでの冷静な態度とは違い、真に迫った表情でカイに迫った。

「・・・わかったよ。アンタの事は全く知らねえけど、助けてもらったしな。悪い奴にも見えねえし、協力するよ。」

カイは絢の気持ちを受け入れた。

「ありがとう！一緒にがんばろう！」

とある教室

今は使われていない、空き教室の様だ。

椅子に座る男

その両端に2人の男女

「さあて、オレらもかなり有名になってきたな。そろそろ他のグループをシメるか。」

椅子に腰掛けた男が静かに口を開く。

側近の男が言葉を返す。

「この学校にはオレ達の他にもヤンキーがごまんという。下手に動けばエラいメに遭うぜ?」

「関係ねえさ。こつちも数を揃えてんだ。集団の構想になる事も想定してるさ。」

「今時いないでしょうね。本気で学校の頭になろうなんて不良は。」
もう1人の側近が冷静に答える。

椅子に腰掛けている男は笑みを浮かべた。

「だからこそやる意味があるのさ。全校生徒を参加に置き、満校《
》のトップに立つ。誰もやらないならオレがやってやる。クック・
・。」

「噂ではオレ達を調べまわってる女がいると。」と側近の男。

「ああ? 度胸のある女だ。どつかの回し者《まわしもん》か?」

「いえ、普通の女子生徒みたいよ? 一体何の様なしらね。」

そして不適に笑う男

「クックク・・・・。良い機会だ。その女拉致って・・・みんなに
オレらの怖さ見せ付けてやろうぜ。」

「大丈夫なの？そんなのさすがに教師達が・・・。」

「先公^{センコー}《》にビビってる様じゃ不良^{ワル}《》は出来ねえよ。ここから一気に飛躍するぜ。オレらのグループわよ・・・。」

つづく

第2回 影は笑う（後書き）

ノートで下書きしてから書く様にしてるんですけど、その時点では内容に納得のいかない部分もあります。でも今日パソコンで本文を書いたら良い具合に直せました。とても嬉しかったです。

第3回 悪魔の野心（前書き）

不良グループの野望を打ち砕く為絢と仲間になったカイ。同時に不良グループの元締めが動き出す。

第3回 悪魔の野心

昼休みに、カイと絢はもう一度集まった。

「へ、今日は朝から大変だな。怪我しちまったしよ。」

「大丈夫なの？あの後保健室へは行っただ？」

絢はカイの傷を心配している。

「ハッハッハ。色々めんどくさい事になるんで行っただねえんだ。ア
ンタのおかげで良くなってるしな。」

「そう。よかった……。」

ホツとする絢

「ねえ、アナタの名前まだ聞いてなかったわね。」

「そうだったな。オレの名は東堂カイ。2年8組だ。」

「8組だったの。通りで会わない筈ね。私は2組よ。」

「そうか。教室も離れてるしな。あと、ずっと気になってたんだけ
どさ……。」

「え？」

「どうしてオレがヤンキー共を追ってる事知ってたんだい？」

「あ、ごめんなさい。まだ行つてなかったわね。偶然にも、私もアナタが今朝倒した商人^{バイヤー}《》を追つてたのよ。私がアイツの様子を見ると、あなたが現れて。同じ目的の仲間がいたんだってホツとしたわ。」

1日に2回ホツとしたわけである。

「そうだったのかい。独り言でも色々言つてたから聞いてたんだな。」

「ねえ、もっと仲間が必要と思わない？もしかしたら私達と同じ事を考えてる人達がいるかもしれないわ。」

「いるかなそんな奴。この学校はキチガイばかりだからな。」

「大丈夫！良い人で、正義感の強い人だつてきつというわ！」

「そうだな。さがしてみつか（いると良いけど）」

同じ頃

憲次とハルミはグループのリーダーに呼び出されていた。

例のあの男である。

朝と同じ様に側近の男女もいる。

「ハジメさん。朝だけで売り上げ18万です。この学校の連中はだいたいバマってますな。」

憲次はリーダーに売り上げを渡す。

「ご苦労だ。しかし、まだ田宮が来てねえんだ。何か知らねえか。」

「私達とは違うとこで売ってるから……。今日はまだ見てないよね？」とハルミ

「サボってんじゃないスか？」憲次が言う

「田宮と同じクラスの奴の話じゃ、朝教室には来てたらしい。この事と関係あるかわからねえが、オレらを嗅ぎ回ってる女がいるらしい。」

「そいつが田宮を？でもアイツは喧嘩だつて強えー……。」

憲次は田宮の喧嘩の実力も知っている。

女にヤラれる筈は無いと考えた。

「その女の仲間にやられたのかもな。真相はまだわからねえけどな。とにかくオレはその女を見つけたら容赦無く拉致ってボコるつもりだ。おめえらも怪しいのには気をつけな。」

（ようし。ここはオレが手柄を立ててやる。の女炙り出して……へへ。」

つづく

第3回 悪魔の野心（後書き）

なるべく早めに更新出来る様に頑張ります。これからヤンキーがいっぱい出てくるかもしれません。

第4回 正義の達人

放課後

拳法部

部員達が稽古に励んでいる。

「ヌンリヤア！フンヌリヤア！ヌンフリヤア！」

この学校は学力は低くてもスポーツに関してはちょっとだけ功績を残している。

ちよつとだけ。

拳法部もその然りで、何度か全国大会に出場している。

部員1人1人のレベルも高い。

しかし現在の在籍部員数は8人しかいなかった。

「まずい。中学ではトップレベルだったオレの実力が埋もれてきた。先輩達はやはり強い・・・！」

2年5組 沖田武タケル（17歳）

拳法の腕前は凄い。

しかし部活では3年生のぼうが目立っていた。

そこへ顧問が現れる。

「おい沖田。おめえは強^{ツェ}・けどここが戦力外だ。辞めな。」

「そ、そんな！ヒドイっすよ！部員だって少ないんすから、勘弁してくださいよ！」

「バーロウ。3年より下はおめえだけだ。あいつらが引退した時点で廃部するつもりなんだよ。」

「ええ！でもきつと来年何人か入ってきますよ！」

「毎年そんなに入って来ねえじゃねーか。期待してねえよ。」

部活終了後

「ちきしょー！！んだよアホ野郎！せめて廃部までいさせてくれよ
つたく！」

1人怒り狂う武

そこへカイと絢が。

仲間を探す為校内を調べている。

「アレは拳法部の人だな。めっちゃめっちゃ怒ってるぞ。」

「なんか・・・辞めさせられたみたいね。」

同じ様に憲次がこっちに向かってくる。

なんとカイが今朝倒した不良・田宮を連れてである。

「ふん。田宮。おめえを何時間も気絶させるなんて、よほど強い奴にやられたんだな。」

「いやマジであいつは半端じゃないっす！」

「そうなのか。ハジメさんの話じゃもう1人、女がオレ達をつけてるらしいんだ。」

「マジっスか？グルじゃないスかそいつら！」

「多分な。とにかくお前をヤツた野郎を……。」

「あ、あいつだ！」

「何！？はええ！」

カイと絢も2人に気づく。

「アレは今朝の！」

「仲間を連れてるわ！」

「てめえ今朝はよくもやってくれたじゃねえかこの野郎！」

「お前か。オレ達に事を調べまわってる女は。良い度胸してるじゃねえか。あ？」

「東堂君……。」

憲次の気迫に戸惑う絢

「この男……強そうだ……。」

「ついてきてもらっぜ。どうなるかはわかってんな？」

憲次は絢の腕を引っ張る。

「きゃあ！」

「待ちやがれてめえ！」

カイが制止する。

「おとなしくしろ。おめえも来るんだ。」

ナイフを出す憲次

「やめろこのヤンキー共があ！」

「あ！？なんだコラア！」

「憲次さん！あいつ拳法部の奴っスよ！」

「この学校が理不尽な奴ばっかりだな。オレがシメてやるぜ！」

続く

第4回 正義の達人（後書き）

即席で作った話です。

故に武も即席です。

即席の達人ですわ。

第5回 強き人（前書き）

憲次と田宮はカイと絢を見つけ出し、攻撃を仕掛ける。しかしそこに、元拳法部・沖田武が現れた！

第5回 強き人

「お、お前は・・・加勢してくれるのか!？」

カイも憲次らと戦おうとしていた。

「ハハ。オレはこうゆう理不尽な奴らが嫌いなんだ。さっきからちよつとムカついてるしなあ!」

しかし憲次も逆上する。

「おい拳法部。怪我してえのか?オレの邪魔すんじゃねえぞ。田宮、この女を頼む。」

絢は田宮に捕まり動けない。

「話して!・・・東堂君!」

「水谷い!てつめえ、またボコられてえのか!」

「動くんじゃねえぜ。この女ぶつ刺すぞ!」

またもナイフを取り出す田宮

その時

「おおおおりゃああ!」

バキ!

かけ声と共に武が鉄建をぶちかました。

「ぶごぉあ！」

倒れこむ憲次

「グ・・・クソオ！歯が！」

「憲次さん！！」

「スゲエ！さすがは拳法使いだ・・・。」

「強いわ・・・！それに正義感も・・・。」

カイや絢もこの男なら心強い仲間になると確信した。

「セリヤア！」

「じっほお！」

この一撃で憲次は完全に失神した。

「憲次さん！クソ、てめえ！」

喧嘩の実力が自分より上である憲次が倒された事で、田宮は自分の危機を感じた。

カイも武の実力に驚く。

「やるな。アンタならオレ達と一緒に・・・」

「てめえら調子に乗ってんなよ！この女の顔に傷付けられたくなかつたら・・・！」

しかしカイは余裕であつた。

「１回ボコられといて随分余裕じゃねえか。お？」

「だまれ！てめえこそ自分が何したかわかつてんのか！」

「あ？」

「オレらのグループの頭は容赦しねえ。喧嘩売ろうもんなら殺されるぜ。お前らだって確実に・・・。」

「そうかい。そーゆう奴がいるから困ってんだよ！」

カイは思いつきり田宮のスネを蹴る。

「！！！！！？？」

激痛の余りナイフを落とす。

そしてその場に跪く。

カイはそのまま顔面に蹴り上げた

「ぶおおあー！」

再び田宮は気を失った

「水谷！怪我あ無いか！」

「ありがとう。今度は逆に助けられちゃったね。」

「お礼だよ。アンタもありがとな。」

「ああ。偶然出くわしちまってな。オレは沖田武。ちょっとした事で拳法部退部になったんだ。」

「そうなのか。オレは東堂カイ。よろしくな。」

「私は水谷絢。本当に助かったわ。ありがとう。」

「しかし。これでオレもこいつらに目えつけられちゃったな。」

「そこで相談なんだけどさ、オレ達と一緒にあいつらと戦って欲しいんだ。」

「私達、あのグループが嫌いで・・・思い切って戦おうって決めたの。少しでも信頼出来る仲間と。」

「そうか。別にいいよ。どうせこれからアイツらとやりあう事になるだろうしな。東堂か。お前も強そうだしな。」

「ありがとう！よろしくな！武！」

「これからがんばろう！」

「ああ！おもしれえ！また燃えてきたよおれ！」

こうして3人目の仲間が加わった。

しかしそれを見つめる影がまた・・・

続く

第5回 強き人（後書き）

展開速いとか遅いとかあまりわかりません。でもスピーディーな方が
良いと思っています。でも更新は遅いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0701g/>

壁だらけのスクールライフ ～バッドネス セブンデイズ ウォー～

2010年10月30日05時29分発行